

## 神戸女学院史料室だより

一九八七年は、デイヴィッド・ラーソン先生の計にあつて暮れた。院長顧問・音楽学部教授という先生と史料室とのおつきあいは、先生が、デフォレスト女史の英文神戸女学院史（七十五年史）を書き継いで百年史にするという使命をお受けになったことに始まる。史料を求めての時折の御来室を皆が心待ちにしていたのは、単に一同が仕事熱心であつたからではない。芸術家でありながら怠りなく現実を見ずえる歴史家の目を持ち、悠揚迫らざる言いまわしの妙の中に熾烈な宣教師魂をひらめかせることのできる方とのしばしの対話の、何と感銘深くまた楽しかつたことか。そのラーソン先生の

肝煎りで開催の運びとなつた六月二十三日の「創立者ミス・ダッドレーを偲ぶ会」のことは別項に掲げるが、史料室にとつてこれは真に光榮な遺産であつたといふべきか。これからもよき御助言を……と期待していた矢先の計は、摂理とは言え、大切な援護者を失なつた悲運の感に心を重らせる。

一方史料室内のことを言えば、昨春、吉年ユウ子囑託職員（現・調査室囑託職員）に暫時救援を頼んだが、六月に総務課の吉田真紀専任職員の着任を許された。吉田姉は本学院中高部から神戸大学と同志社大学院に西洋史を学び、公私両面での熱心で積極的な姿勢が頼もしい。また秋には、渡辺久雄顧問が勲三等瑞宝章に叙せられた。一同心から慶賀し、なお末永き御指導を頂けるようにと願っている。（若山 晴子）